

## 三年を振り返って

—一九九八年一月二十日礼拝の講話から—

施設課長 中 井 哲 男

未曾有の大地震を体験して、先週の土曜日の一月十七日を迎え、早くも三年が経過しました。昨年六月十一日に無事、ジュリア・ダッドレー館、メアリー・アンド・グレイス・ストウ学生寮西館・北館、アンジー・クルー館、茶室松風庵の新築五棟の献堂式を挙げる運びとなり、その後、無事学事に専念できるようになりましたことは、誠に喜ばしい限りですが、その間、対応のために、担当職員らには言葉に尽くせない様々なことがありました。あまりにも長かった三年間の出来事は短い時間では語り尽くせぬかと思いますが、特に印象の深かったことをお話しさせていただきます。

はじめに、奇蹟が神戸女学院を救ったこと。

これは、学内寮の寮生が全員無事に避難できたことです。RC構造の新寮・南寮はともかく、大学の寮生計一五五名のうち六〇名が居住する北寮と中高部の二二名が居住する東寮は木造二階建て瓦葺きであったために、あの強い衝

撃で無残にも四分の一は北側に傾斜、外壁、内壁は剝離剝落し、天井材、照明は落下、書棚、家具類は倒れ、窓ガラスは飛散し、北側の廊下部は約六〇センチ程醜く口を開け傾いていましたが、その大パニックの中を全員無事グラウンドに避難できたことは、奇蹟だと思っています。

舎監の誘導判断、また学内居住の二名の施設課職員と当日のガードマン諸氏の働きには大変感謝しています。北寮、東寮は共に昭和八年（一九三三）竣工であったにもかかわらず倒壊にはいたらず、寮生を無事に救い、その目的を達成したと今も思っています。毎年実施している防火避難訓練も功を奏したと思います。

当日駆けつけた院長先生はじめ、学院チャプレン、教職員らは、学院の被害を目の当たりにして愕然としながらも、寮生が全員無事とわかりホッとした様子がかがえませんでした。

余談ですが、当日、パジャマ姿のまま単車で駆けつけた人がいます。今では笑い話になっていますが…。

ライフラインの復旧には、大学発行の『震災の記録』に復旧に心血を注いだ藤原職員の記録があります（掲題書三六頁以下―編集者記、以下同じ）が、思い出深いものがあります。以下は復旧の様子です。

### ①電気関係

震災直後、新社交館の電気室の保護操作作動で全学停電となる。まず、寮生の避難場所となった同窓会館への送電を急務とし、送電を再開する。電柱、変電設備室は各所傾斜していたが、電気設備の点検修理の結果、全学の送電までに要した日数は三日で、意外に早かった。

### ②電話

一般電話回線は輻輳（一時に集中して使用のため回線パンク）のためパニック状態になった。緊急回線一回線を学

生・生徒・教職員の安否確認用に充てる。寮生は公衆電話より連絡。建物倒壊による回線休止・移設に一週間、電話回線が正常に戻るまでに三週間を要した。

### ③給排水

北寮裏にあった受水槽（FRP製一〇〇頓）は振動のため破損箇所から漏水があり応急修理。その後受水槽の水は、出勤教職員の増加とともに一月末には底をつき始め、施設課員を慌てさせた。この水は、被災地から出勤する教職員延べ一、一〇〇人の昼食を賄っていたため、急遽関西学院さんにお願ひして飲料用井戸水を貰うけた。トイレの排水にはプールの水を使用。入学試験を控え、仮設トイレ五〇台設置。学院内の給水本管の復旧作業を先行するが、給排水管は埋設部分が多くて復旧に手間どり、四か月を要した。このため、大学の入学試験は一か月延期となる。水の大切さを身にしみて実感したのはこの時である。命の水の提供に、関西学院さんに心より感謝申し上げます。

### ④ガス

ガスは震災当日、本管・枝管からガス漏れがあったが連絡不能。やむなく各館のバルブを閉める。振動などで実験台の配管が破断しており、復旧に手間どる。学院にガスが供給されるまでに二か月を要した。その間、携帯用ガスコンロで賄った。

### ⑤空調関係

大学棟のボイラーが横転し、各館の放熱器・室外機も転倒破損。被害は甚大であった。このため、今季のボイラー使用は不可能と判断し、急遽、震災の影響のない名古屋から石油ストーヴ一〇〇〇台を購入した。このため、水に次いで灯油配達も日常業務となる。重油タンク漏洩検査を公的機関に依頼、各館の配管及び暖房器具のテスト、修

復に三か月を要した。

#### ⑥土地関係

震災直後、学院内の道路の陥没・亀裂を調査し、西側に被害が集中していることが判明。その真下には市営住宅があり、調査の結果、樹木の根がむき出しになった裸地すべり跡三か所を発見、危険と判断しT土木に連絡するも電話が不通。亀裂部分にブルーシートをかけ雨水の侵入を防ぐ。翌日、仁川百合野地区で土砂崩れによる生き埋めの救出がテレビで報道され、恐怖感に苛まれた。復旧を梅雨までに――と急いだ。工法はフリーフレーム・アンカー工法二か所、石積擁壁一か所。その他、道路、側溝の被害多数。復旧に七か月を要した。

#### ⑦建築

設計に関する相談事には、本学院のキャンパスの創設に携わったV社が当初から携わり、見積りあわせの結果、施工はT社に依頼。応急仮設校舎三棟の建築に三か月、解体には九か月、建築の補修復旧に延べ一年半を要し、新築五棟の建築には、建築確認申請書提出より竣工までに学生寮一年、グッドレー館とクルー館は一年二か月を要した。

今一つ印象に残るのが、全員の努力の結果が神戸女学院に復興をもたらした事。

何と言っても最大の難関は復旧事業計画書の作成作業でありました。震災から約一か月後の二月十六日に災害復旧事業に関わる事務説明会があり、学院から三名が参加しました。その時「激甚災害法」という言葉を初めて聞き、私立学校にも助成措置があると知りました。前掲の『震災の記録』に吉田総務・経理部長により詳しく記述されているものです(掲題書三九頁以下)。

この「激甚災害に対処するための特別の財政援助等に関する法律」の数回の説明の中で、被害額算定は見積書を基に単価・数量・工数が適正かどうかを見極めるので見積書作成には充分注意が必要と言われました。初めての経験で、情報不足もありました。交通網が寸断され、電話がかからない。その上同様に被災していた地元の業者さんに説明し協力してもらうことには実に苦労しました。また同じ業種に三社の見積りを必要としました。しかも、関西の請負業者の見積書は「何々工事一式合計×××円」の表示が多いが、その一式表示では不可とされ、それに施工前の被害状況、施工の内容が確認できる写真が必要とありました。レスキュー隊の活躍で、危険と思われる設備の一部や備品の壊れたものはずでにグラウンドに山積みされていたため、これは、施設、経理の担当者を慌てさせました。（レスキュー隊とは震災当初出動した教員職員が合同で編成した組織で、余震が続くので危険回避のため単独行動はせず、五人単位のグループに編成され、現場の復旧にあたっていました。）

被害状況を確認できる写真と復旧工事費の積算は想像を絶する細かさで『震災の記録』に児玉経理課長が記しています（掲題書四八頁以下）が、まさにそのとおりで、その後写真は業者さんの分をいれますと約五千枚に達しました。被害は、建築、電気、空調、衛生、水道、左官、塗装、タイル、窓、等々多業種にわたっていたため、担当者の行動は、朝昼は業者さん呼び被害現場で復旧工事の打ち合わせ、夜は見積書をもとに復旧事業計画書の作成と、震災以降、睡眠時間を削つての作業でありました。土曜日の深夜の別れの挨拶は、「また明日ネー！」が合言葉でした。

お蔭様で五月三十一日、復旧事業計画書の提出にこぎ着けることができました。

これまで、文学館の屋根及びデフォレスト館の修繕工事は土曜日曜及び授業の合間に行っていましたが、夏休みに入つて本格的に全学院の建物の復旧工事が実施され、同時に、傾いた中高部三号館の解体工事も実施されました。

そしていよいよ、文部省、大蔵省、兵庫県による災害復旧事業の現地調査及び査定が九月十二日から十四日と決ま

りました。これが震災復旧事業の最大の山場であり、壮絶な戦いでもあったと思います。これらのために学院代表に施設と経理の担当者は日夜心血を注いだ――との言葉は過言ではなかったと思います。実地調査は一日目の午前中であつて、午後からは書類の調査が中心となりました。被害写真、建物の被害状況がわかる図面、工事費積算内訳書、業者の見積書のほか、備品については資産台帳が出され、学院の復旧に携わっていた業者二〇社四〇名の同席をお願いしたところで、厳しい質問がなされ、それらの状況や工事の妥当性を説明しました。二日間の調査を経て査定を受けました。査定の結果は本学院が予想した以上のもので、新築については取り壊した建物の面積が全て認定され、仮設校舎(第二期工事)設備備品が一〇〇パーセント、土地復旧が九八・五パーセント、建物、工作物は八五パーセントと高い評価を得ました。

これらを終始準備作成した法人の担当職員ならびに学院内外のたくさんの方々の協力と結集がなければ、この復興はありえなかつたと思います。これらの方々の血の滲むような努力の結集が実りを得ました。長期間を要する復旧にあつて、今日まで担当者全員が健康でやってこられたことに、また、常に暖かいご支援を下さった教職員・学生・生徒、家庭会・同窓会の方々及び種々御協力下さった全ての皆様方に、この場を借りて心より感謝の意を表したく思います。

(附一)

本稿に再三紹介された『震災の記録』について

[史料室記]

表題 『震災の記録』

―不測の事態に備えて―

発行 一九九六年一月十七日

神戸女学院大学

内容項目及び執筆者(職責☆は執筆当時のもの)

一、災害発生時の対応について(総括)

二、被災後の状況と対応

1、事務組織関係

2、教務関係

3、学生関係

震災当日の寮及び寮生の対応とその後

被災学生に対する学費減免措置

4、入学試験関係

全般的事項について

個別的事項について

阪神大震災に伴う入学試験関係の特別措置について

5、図書館関係

6、英文学科

7、総合文化学科

8、音楽学科

☆ 学長 山内 祥史

☆ 大学事務長 鈴木 信一

☆ 教務部長 川合真一郎

☆ 学生課長 下川勢津子

大学舎監 村木 麻子

☆ 入試委員長 松田 高志

☆ 入試課副主査 荒木 初広

☆ 図書館事務長 千田 宏

☆ 学科長 上 紀子

☆ 学科長 三上 勝也

☆ 学科長 若本 明志

9、人間科学科

10、総務関係

11、施設関係

施設やライフライン等の被害とその対応

(1)崖崩れ (2)地質概要 (3)復旧作業・対応 (4)防災工事計画(対策)

(5)電気 (6)電話 (7)給排水 (8)ガス (9)空調

三、災害復旧と財政

1、復興計画について

2、激甚災害法に基づく災害復旧費補助

3、阪神地区被災私立大学・短期大学連絡会要望事項、等

4、復旧事項の査定とその経緯

四、阪神・淡路大震災を体験して

1、震災について思うこと

2、発生直後の対応など

3、震災のことあれこれ

4、長い一日

五、資料

1、神戸女学院の施設配置図及び被害状況概要について

2、阪神・淡路大震災災害復旧事業現地調査結果

① 全・半壊建物復旧事業計画概要

人間科学・家政学部事務長 東松 道雄

総務課長 日比 正三

施設課長 中井 哲男

施設課課長補佐 藤原 秀司

総務・経理部長 吉田 明

総務・経理部長 吉田 明

経理課長 児玉 修

鈴木 信一

荒木 初広

☆ 入試課副主査 山原 一郎

中井 哲男



- ② 復旧事業計画総括表(大学)
- ③ 全・半壊及び新築復旧等建物配置図
- 3、震災復興募金について
- 4、連絡網

- ① 神戸女学院大学連絡網
- ② 学部長会連絡網
- ③ 学務委員会連絡網
- ④ 英文学科連絡網
- ⑤ 総合文化学科連絡網
- ⑥ 音楽学科連絡網
- ⑦ 家政学部・人間科学部連絡網
- 5、震災日誌(二月十七日(火)から二月十九日(日)の災害の記録)

(附二)

学院内の震災関連出版物目録(史料室受入分)

- 神戸女学院「學報」第一一九号—一九九七年七月八日発行—「震災復興事業完成」特集。
- 同「學報」第一一八号—一九九七年三月十八日発行—四一頁、四五頁—四七頁。
- 同「學報」第一一七号—一九九六年十二月十八日発行—五頁、二〇頁。
- 同「學報」第一一五号—一九九六年三月十五日発行—一頁—二頁、一一頁、二八頁。

同「學報」第一四号—一九九五年十二月十八日発行—一頁—二頁、四頁—九頁、九頁、一〇頁。

同「學報」第一三三号—一九九五年七月七日発行—一頁—二頁、二八頁。

同「學報」第一二二号—一九九五年四月二十八日発行—一頁—二頁、三頁—四頁。

神戸女学院「震災復興事業 一九九七」—一九九七年六月発行。

神戸女学院大学『震災の記録—不測の事態に備えて—』—一九九六年一月十七日発行。

神戸女学院大学学生相談室「神戸女学院大生の阪神・淡路大震災〜時間の経過と生活の変化〜」—一九九六年四月十日発行—学相だより特別号。

同「学相だより」第一号—一九九五年五月号—阪神大震災に関するアンケート集計結果報告その一。

同「学相だより」第二号—一九九五年六月号—阪神大震災による被災状況に関するアンケート集計結果報告その二。

同「学相だより」第三号—一九九五年七月号—阪神大震災による被災状況に関するアンケート集計結果報告その三。

神戸女学院大学学生自治会新聞部『おちよぼ口』第三五号通巻一七四号—一九九五年七月二十日発行—「阪神・淡路大震災」特集。

神戸女学院中学部・高等学部『復旧とさらなる発展を祈って—阪神・淡路大震災記録—』—一九九五年九月七日発行。

*Kobe College High School, The Great Hanshin Earthquake Report—一九九五年十月発行。*